

はじめに

平成8年の秋、中野サンプラザにて佐藤幸利先生による『資金会計セミナー』が開催されました。

そのセミナーで佐藤先生は「お金を色（性格）分けすると、何色と何色に分けられますか？」という質問をされました。

30人あまりの聴講者のほとんどが公認会計士や税理士などの専門家。しかし、誰一人として答えられないでいました。

すると佐藤先生は、

「ここに一万円で仕入れた商品があります。この商品を一万五千元で売却しました。そしてここにその売却代金である一万五千元の現金があります。この現金、一万五千元の色（性格）は大きく2つに分けることができます。五千元は儲けのお金、そして残りの一万円は儲け以外のお金です。」

私はこの佐藤先生の説明に驚かされました。

今までの「お金に色（性格）付けはできない」という常識を見事に覆した説明に驚きとともに、新鮮さを感じたのです。

現行会計では「お金」を色分けする考え方がありません。損益計算と資金計算は別物であると考えているため、利益と現金残高は一致しないと考えているのです。

佐藤先生自身は昭和61年ごろにこの発見をされたそうです。

まさに、会計学上のコペルニクス的な発見！ 世の中の人々が天動説（お金に色は付かない）を信じ込んでいた時に、地動説（お金に色は付く）を教えてくれたのです。

私はこの佐藤先生のセミナーを機に、会計学に対する見方が一変してしまいました。そしてこの「資金会計理論」を理解したいがために、佐藤先生にいろいろとご指導して頂いたのです。しかし、残念なことに平成15年の12月に佐藤先生は道半ばにして他界されてしまいました。

その後も私なりに研究を続け、その成果を纏めて発表することが佐藤先生への恩返しでもあると思い、『利益のお金が見える会計』として本書を発行するこ

とにしたのです。

商取引の原則から見れば、必ず相手が存在するから資金が動きます。だから、「利益」と「利益の現金」は必ず一致します。つまり、利益とは、「利益のお金」であり「利益の現金」だと言う事です。現行会計制度が利害関係者への報告の為に一致しない会計ルールを作っているだけなのです。

このような会計ルールで作られた利益があるからと言って、そのまま利益の繰延と言う節税商品を購入するという節税対策をしいのでしょうか？

そんな時に、「財務強化につながる節税なのか？」「つながらない節税なのか？」その判断基準としても、この「時点利益資金会計理論」の考え方にもとづく利益資金管理表[プロフィットキャッシュフロー管理表 (P・C・F 管理表)]が重要となってきます。これが私の言う「プロフィットキャッシュフロー経営」であり、「真のキャッシュフロー経営」だと考えます。

社長するなら、お金の色を覚えなさい。

一般的に「お金」には色は付かないと言われていますが、その根拠の説明がありません。

一方、「お金」には、「自分で稼いだ利益のお金」と「借金のお金」があることは少し考えて頂ければご理解して頂けると思います。問題は、この区分の方法を教えてくれる会計学が今まではなかったことです。

．．．．．

「お金」そのものには、色は付かない。しかし、「お金」には、「利益のお金」(黒色)と「借金のお金」(赤色)があるから、これを区分する事が重要になります。

これから、この二つの説明をし、疑問にお答えしたいと思います。

唐突な質問に感じる方も多いと思いますが、改めて「利益」とは何なのでしょうか？を素直に考えてみてください。利益とは、現実に「利益のお金」として存在していないと意味がありません。

しかし、現行会計学には、期間損益会計が求める利益が何処に存在しているか？の説明がありません。その上で利益計算と資金計算は別物だと述べています。本当に、利益計算と資金計算は別物なののでしょうか？

商売には、必ず相手が存在するから、必ず「お金」が動きます。だから、信用取引の債権・債務の決済後は、必ず利益計算と資金計算は一致するはずです。

商売の原則は、儲けのお金を稼いで残すことだと考えます。そうであるならば、「利益」とは、使える現金で存在していることが原則だと考えます。

現行会計が、利益計算と資金計算が別物だと言うのは、別物になるような減価償却・引当金繰入・時価評価などのルールがあるからです。この期間損益を求めるルールは、商売の原則から見ると例外的なルールなのだと考えます。

現在、ほとんどの会計学者・税理士及び会計士さんが、この利益と資金の関係を明確に説明できないでいるのが現実となっています。

利益のお金が見える会計とは？

昔から「商売は金儲け」といわれていますが、この「金儲け」という場合の「お金」とは、「儲けのお金」であり「自分で稼いだお金」、つまり「利益のお金」だということです。

創業から現在まで一生懸命に商売をした結果「儲けのお金（＝利益のお金）」をいくら稼ぐことができたのか？ また、その「儲けのお金」が今いくら残って

・・・

いるのか？ を明確に把握できる経営者のための資金管理会計のことを「利益

.....

のお金が見える会計」といいます。

つまり、現行会計制度が期間損益を重視した「期間損益会計」であるのに対して、私のいう「利益のお金が見える会計」は、創業から現在までのすべての

..

商取引を時点で捉える「時点利益資金会計」です。

現在、「お金には色が付かない。」という考え方が一般的ですが、実はお金は「儲けのお金」と「借金のお金」に色（性格）付けができるのです。

しかし、現行の「キャッシュフロー計算書」の区分はそうなりません。

それは、「お金には色が付かない。」という会計版の天動説を信じているからだ
と考えています。

本書は社長さんたちが事業活動で稼いだ利益のお金と、その利益のお金の残高
が見える本です。ひとりでも多くの社長さんたちの潤滑な経営の足がかりの為
に、また、この理論に賛同して頂ける多くの会計専門家にもお読み頂き、この
理論を普及して頂けたら幸いに存じます。

平成 26 年 2 月 吉日

著者 有限会社マーフシステム 代表取締役 税理士
財産経営コンサルタント
稲 垣 保